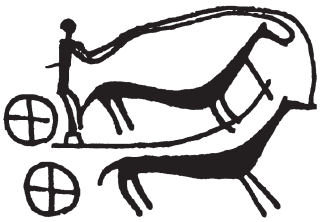
センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter　No. 76



魅力ある授業を目指して
—北海道大学教育ワークショップ開催—　(4 ページ)

第 58 回東北・北海道地区大学一般教育研究会を開催
(7 ページ)

特別講義「大学と社会」開講　(17 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言　FOREWORD

ボローニャ宣言と札幌サステイナビリティ宣言
—大学教育の国際化をめぐって—

北海道大学副学長（国際交流担当）　本堂 武夫

表題に挙げた二つの宣言の間には直接的な関係は何もありません。宣言に至る背景も目的もまったく異なるものですが，両者に通底する精神をあえて強調したいと思ってこの筆を執ることに致しました。

ボローニャ宣言

ボローニャ宣言は，1999 年イタリアのボローニャでヨーロッパ 29 カ国の大臣が署名した高等教育に関する宣言です。拘束力のない宣言に過ぎないのですが，その後ボローニャプロセスとして知られるように，ヨーロッパにおける高等教育制度の共通化が着実に進展しています。ヨーロッパ各国の大学は，それぞれの伝統と格式によって異なる制度を当然としていたはずですが，この 10 年で制度の共通化が多くの国で受入れられたことは驚くべきことだと思います。もちろん，すべての大学がこの制度に移行するわけではありませんし，教育の内容については当然ながら各国の独

自性が容認されているのですから，長年にわたって培われてきた各大学の伝統や特徴といったヨーロッパの多様性は失われずに残るのかもしれません。しかし，こと制度面に関しては，ボローニャ宣言の影響は徐々に確実に浸透しつつあると言って良いのではないでしょうか。最も大きな改革は，それまで各国様々であった大学教育制度を学部と大学院に明確に分ける新たな制度に統一したことですが，これはむしろ日本などの制度に近づいたことに他なりません。重要な点は，参加大学すべてが同じ制度のもとで単位互換制度 (ECTS) を確立して，学生の流動性を高めたことにあると思っております。

ボローニャ宣言の背景には，アメリカに対抗するヨーロッパ高等教育圏の構築という大きな目標があったとのことですが，学生の流動性を高めることがヨーロッパの安定化に貢献するという期待もあったと聞いております。ボローニャ宣言以前も，かなりの流動性はあったはずですが，共通性の高い新たな制度の下では，セメスター毎に学生が他国の大学に移動することが可能になったという点で，それ以前とは比べようもないほど流動が容易になったようです。環境問題に象徴されるように，今われわれは一国ではどうにもならない数々の難問を抱えています。このような新たな制度の下で，国境という壁を越えて育った人材が解決の鍵を握る日が遠からず来るのではないでしょうか。少なくとも人脈というネットワークが国境を越えて広がることは確かでしょう。

札幌サステイナビリティ宣言

一方，札幌サステイナビリティ宣言は，2008 年 7 月 1 日に G8 大学サミットにおいて採択された宣言です。G8 大学サミットは，北海道洞爺湖サミットを機に，わが国の大学が世界の大学に呼びかけて開催した初の試みです。テーマは，「グローバル・サステイナビリティと大学の役割」で，14 カ国 35 大学の代表が札幌に参集し，短い期間でしたが熱心な議論が行われました。札幌サステイナビリティ宣言は，G8 大学サミットの公式サイトで公開されていますので，ご一読いただきたいと思います。私がここで強調したいのは，持続可能な世界を次世代に遺すために，大学は政策も含めた問題解決に重要な役割を担ってゆくという決意表明が盛り込まれた点です。もちろん，複雑な相互作用を理解するために科学的知識の再構築や大学間の連携の強化が強調されたことも重要ですが，科学と政策の関係に言及した点にこの宣言の特徴があると思います。当然のことながら，科学と政策の間には一線を画すべきであるという議論もあり，宣言では大学の強みとして中立性と客観性を失ってはならないことが強調されていますが，大学首脳が持続可能性に関する研究と政策について世界の大学が協働すべきであるという認識を共有したことに新たな一歩を感じています。

北大サステナビリティ・ウィーク 2008

札幌サステイナビリティ宣言が，ボローニャ宣言のような実効的な効果を生み出すか否かは，各大学のこれからの取組みにかかっています。この宣言を読んだだけでは，具体的に何が行われるのか分からないと思います。そのヒントは，本学が実施したサステナビリティ・ウィーク 2008(6 月 23 日– 7 月 11 日) にあると思っています。このウィーク期間中に 42 のシンポジウムや市民講座と 5 つの展示・公開講座などが行われました。各企画のキーワードをカテゴリーに分けると，①気候・環境変動 (16 企画)，②知的革命，技術革新，社会変革 (12 企画)，③自然史，生物多様性，自然保護 (12 企画)，④食糧，水，衛生，健康 (12 企画)，⑤教育，人材育成，啓発 (17 企画)，⑥人権，文化，平和 (7企画) となっていて，持続可能な社会を論ずるのに必要な課題がほとんどすべて網羅されています。このように羅列すると，総合的・統合的視点が欠けているように見えるかもしれません。たしかに，6 つのカテゴリー全体を俯瞰するような議論には至っていませんが，個別の課題解決にはそれに関連する分野との相互作用が不可欠であることが随所で議論されています。言わば，札幌サステイナビリティ宣言の具体的な課題が，その前後のウィーク期間中に俎上に載せられていたのです。

例としてやや我田引水ですが，本学と北海道，北海道経済連合会，北海道開発局，北海道新聞社共催の「北海道とロシア極東地域の持続可能な開発に向けた環境フォーラム」を総合的かつ具体的な問題へのアプローチの一例として紹介したいと思います。ロシア極東地域と北海道は日本海とオホーツク海を挟んで一衣帯水の関係にあります。この地域一帯の

豊かな自然環境や豊富な漁業資源は両者にとって貴重な資産ですが，同時に工業化や都市開発，天然資源開発の影響が懸念されています。この環境フォーラムでは，この地域の環境に的を絞って，自然科学，社会科学，行政それぞれの立場から現状と将来について発表と討論が行われました。短い時間でしたが，最新の科学的知見を日ロの環境行政担当者と共有できたことは有意義でした。またアムール川等の水質汚染が深刻な状況にあることが改めて認識されました。急速な経済発展が深刻な公害を引き起すことは，かつて日本が経験したことです。同じ道を中国やロシア極東地域が辿るとすると，我が国にとっても深刻な事態になることを憂慮する声が参加者から出ていました。この地域一帯の開発を自然環境と調和の取れた持続可能な状態に保つためには，日ロだけではなく中国，韓国も含めた各国が共通の資産を守るという認識に立つことが不可欠であり，その基盤としての科学的知見の共有が急がれると同時にそれを政策に反映する必要性を強く感じました。

大学教育の国際化

この例に限らず，同様の問題指摘が他のシンポジウム等でも論じられていたとの由です。今われわれが直面している様々な課題，すなわち食糧，エネルギー，水，大気，廃棄物，感染症等々の具体的問題を議論する時，国際的な協調の必要性が常に語られています。ともすれば対立が前面に出てしまいかねない問題に関して，冷静に将来を見据えて議論する知恵をわれわれはもたなければなりません。そのためには，大学教育の国際化が迂遠なようでいて実は近道となり得ると私は考えています。それは単に国際感覚を有する人材を輩出するということにとどまらず，国際的な人脈と情報のネットワークを構築することが問題解決に不可欠と考えるからに他なりません。この点において，ボローニャ宣言と札幌サステイナビリティ宣言は相通ずるものがあります。

では，大学教育の国際化として一体何をなすべきでしょうか。グローバル 30 という国際化重点大学に選ばれる指標としては，外国人留学生および外国人教員，英語による授業それぞれの数 (割合) が重要であるとのことです。すなわち，外国人の学生と教員がたくさんいて，英語で行われる講義が多いことが国際化の証しということになりますが，これらの数値目標を無理に達成しようとすると，質の低下を招くことになり，トラブルばかり増えることになりかねません。上記のような学生の流動性に重きをおくならば，①カリキュラムや入試等の制度面の国際的通用度と②学生および教員の満足度を高めることを目標にすべきだと私は思っています。どちらも定量化の難しい指標ですが，それらを把握しなければ国際化の実態も把握できないと思います。

①に関しては，単位の互換性や学年暦，入試の時期と方法，使用言語等々たくさんの課題がありますし，ヨーロッパとの通用性を高めるのかアジアかという戦略的な方針も問題になります。日本人学生の海外留学を拡大するためにも，制度的通用性を高めることが重要だと思います。

②については，外国人留学生 (研究者) も受け入れ教員も満足度が高いことが理想ですが，研究や修学上の問題から生活上の様々な問題に至るまで多様な対応が求められる課題でもあります。国際交流室では，外国人留学生・研究者および受入れ教員等から寄せられる数多くの苦情や要望を整理し，対応策をまとめているところです。宿舎の不足など一朝一夕には解決できない問題も多々ありますが，時間をかければ徐々に改善できる問題だとも思っております。

もっと根本的に重要な点は，大学間の国際流動性が増大する中で，またインターネットであらゆる情報が容易に手に入る時代でもなお本学に来て学ぶ価値があるという，満足感を学生に与える教育・研究の内容にあります。言い尽くされたことですが，制度面での国際的な共通化が進めば進むほど，他にはない特色のあるカリキュラムやキャリアパスまで考えた教育システムなど，外国人にも日本人にも魅力的な特徴をもつことが肝要と思います。

サステナビリティ・ウィークで北大を初めて訪れた多くの人から，本学キャンパスの美しさに称賛の言葉をいただきました。大都市の真ん中にあって美しい環境をもっていることに象徴されるような，国際的な人脈のネットワークが本学から広がってゆくことを夢見ております。

（低温科学研究所教授，総長室・国際交流室長）

センター　CENTER

魅力ある授業を目指して
―北海道大学教育ワークショップ開催―

平成20年度第1回目の教育ワークショップが，6月6日(金)から7日(土)にかけて行われました。(平成19年度から教育ワークショップが年2回行われることになり，今年度は11月にも行われます。)

このワークショップの対象は原則として着任5年以内の助教以上の教員で，学内の各部局から総勢28名の受講者が集まりました。

今回のテーマは「魅力ある授業を目指して」としました。平成18年度から始まった「GPA制度」および1年次の「履修登録単位数の上限設定」の導入を真に意義のあるものにするためには，「単位の実質化」(すなわち1単位は45時間の学習を必要とするという原則の実現)の方向で授業の組み立てを工夫するということ，そのためには授業を魅力あるものにして学生の授業に対するモティベーションを高める必要があります。このワークショップのメインの部分では，参加者が4つの小グループに分かれ予め指定された型の授業を設計することにより教育に関する基礎を学習するわけですが，その授業設計の際に魅力ある授業にするための工夫を考えてもらいます。

1日目の6月6日は遅刻者もなく予定通り本部事務局前から研修会場の奈井江温泉行きのバスが出発し，高速道路にのってから参加者の自己紹介で研修が始まり，最初から和やかな雰囲気でスタートしました。表1のプログラムのように，会場到着後総長と一緒に記念写真を取り，総長の挨拶(写真1)ののち，ミニ講義「FDの目的と意義」，「単位の実質化の方策について」があって昼食になりました。

昼食後，オリエンテーションとアイスブレーキング(写真2)があり，研修の中心内容である新しいシラバスを作成するための3回のセッションのうちの第1番目の「目標」に入りました。各セッションは30分のミニ講義とグループ討論(写真3)，全体発表からなっています。休憩を挟んで第2セッション「教育方略」を行い，終了後夕食，休憩を挟んでから，大畑歯学研究科教授による「ハラスメントの段階(ステージ)と相(フェーズ)」という講演(写真4)があり，そのあと懇親会となり1日目が終わりました。

2日目の6月7日は，第3セッション「評価」を行って4つのシラバスが完成し，研修のメインの部分は終了しました。研修室を元通りにした後，参加者の個人的感想や意見の発表を行いました。その途中で昼食タイムとなり，ゆっくり昼食を取った後，帰りのバスに乗って「感想」の続きを行って，やがて札幌駅北口について解散となりました。

写真1．総長の挨拶

写真2．アイスブレーキング

表 1．第 12 回北海道大学教育ワークショップ プログラム

2008 年 6 月 6 日 (金)

8:30 事務局大会議室に集合・受付
8:45 バス出発　研修開始 : オリエンテーション挨拶
9:55 ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着，玄関前で記念写真
10:00 挨拶「FD 実施にあたって」(20 分)(佐伯総長)
10:25 ミニレクチャー「FD の目的と意義」(25 分 + 質問 5 分)
10:55 休憩（15 分)
11:10 ミニレクチャー「単位の実質化の方策について」(40 分 + 質問 5 分)

12:00 昼食 (60 分)

13:00 研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレーキング（30 分)
13:30 ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」(30 分)
14:00 グループ作業 I の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分)
14:10 グループ作業 I「授業の設計 1: 科目名・目標の設定 」(60 分)
15:10 発表・全体討論（40 分)
15:50 休憩（20 分)
16:10 ミニレクチャー「教育方略」「授業例 : 蛙学への招待」(30 分)
16:40 グループ作業 II の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分)
16:50 グループ作業 II「授業の設計 2:(目標の手直しと) 方略」(60 分)
17:50 発表・全体討論（40 分)
18:30 夕食（40 分)
19:10 講演「ハラスメントの段階 (ステージ) と相 (フェーズ)」大畑 昇 / 歯学研究科教授) (30 分)
20:00 懇親会

2008 年 6 月 7 日 (土)

7:30 朝食
8:30 ミニレクチャー「評価」(30 分)
9:00 グループ作業 III の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分)
9:10 グループ作業 III「授業の設計 3:(方略の手直しと) 評価」(60 分)
10:10 発表・全体討論（40 分)　–休憩（10 分) –
11:00 参加者の個人的感想や意見（50 分)

12:00 昼食（60 分)

13:00 バス出発
14:30 JR 札幌駅北口到着

写真 3.　グループ討論

写真 4.　講演の様子

例年と同じようにアンケートをとりました。結果は，分析が終わってから，来年度の「高等教育ジャーナル」に詳しい報告をのせる予定です。ここでは，各グループの作成したシラバスから，講義題目，一般目標および行動目標を載せておきます。

A グループ

科目名：一般教育演習「現代社会を斬る！～大学生らしい議論の作り方～」

テキストを正確に読む，データに基づく，いろいろな立場で。

＜一般目標＞

公平な議論を構築するために，先入観にとらわれずに多角的に物事を見ることができる。

＜行動目標＞

・ニュース，新聞等のメディアテキストを批判的（客観的）に読み，「事実」と「意見」を区別して解釈することができる。
・適切な資料を取捨選択できる。
・自分の意見をわかりやすく伝えることができる。
・他人の意見を理解し，相対化することができる。

B グループ

科目名：一般教育演習「北海道の食未来」

＜一般目標＞

北海道の食・生活の現状を理解し，その長所を紹介する力を身につけ，短所に関しては解決策を提案する能力を身につける。

＜行動目標＞

・グループによる議論を通しての問題提起，解決方法を身につける。
・一般消費者が理解可能なプレゼン能力を身につける。
・調査，インタビュー能力を身につける。
・北海道の食の長所５個を魅力的にアピールする能力を身につける。

C グループ

科目名：総合科目「環境破壊・再生と技術」

＜一般目標＞

北大のキャンパスは日本一豊かな自然環境に恵まれている。われわれをとりまく身近な生き物の種類や生態（生きざま）を取り上げ，生活環境・文化・歴史を学び，北大の理念にふさわしい世界観を身につける。

＜行動目標＞

・自ら取材した北大キャンパスの植物・昆虫の名前が言えるようになる。(ex. 生物多様性の理解）
・自ら情報収集する能力を身につける（対人，文献，フィールド）。収拾した情報を分析し，取捨選択する能力を身につける。
・学外者に北大キャンパスの自然の魅力を伝えることができる。（プレゼンテーション能力）

D グループ

科目名：大学院共通講義「水と生命の循環」

＜一般目標＞

生命の維持に欠かせない水を多角的に理解することにより人類が今後直面する諸問題を挙げることができ，その解決法を考える力を養う。

＜行動目標＞

・異分野の実学的な最先端の研究成果と今後の課題を専門家の視点から理解する。
・毎回授業から疑問点を調べてレポートを作成する。
・最終的にグループごとにプロジェクトテーマを作成し，プレゼンを行う。これを通して専門外の人に学術的に説明できる能力が身に付く要件・申請書を書く。

（西森 敏之）

第 58 回東北・北海道地区大学一般教育研究会を開催

平成 20 年 9 月 4 日 (木) 5 日 (金)，学術交流会館で第 58 回東北・北海道地区大学一般教育研究会が開催されました。

この研究会は 60 年近い歴史をもち，東北・北海道地区の大学・短期大学約 150 校が加盟し，一般教育 (教養教育，基礎教育) の改善に関する研究集会を毎年 1 回開催しています。北大で開催されるのは 5 回目，前回は平成 6 年，旧教養部の最後の年でした。

今回は，佐伯総長 (写真 1) を委員長，脇田副学長を副委員長として，高等教育機能開発総合センター，学務部教務課を中心に，文学部，理学部，外国語教育センターの全学教育科目責任者の協力を得て，2 年前から準備を進めてきました。

本年 3 月，中央教育審議会・大学分科会・制度・教育部会報告「学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ)」が公表されたのを受けて，全体テーマを「新たな学士課程教育の構築」，3 つの分科会のテーマを「初年次教育・導入教育・キャリア教育」，「高大連携・地域連携・国際連携」，「検証・改善・研修」とし，合計 15 本の報告と，活発な討論が行なわれました。大学設置基準の改正による「FD の義務化」を受けて，各大学の FD の紹介が 4 本もありました。

全体会では，1 日目には筑波大学・小笠原正明特任教授 (本学名誉教授) が基調講演「新たな学士課程教育の構築― FD の義務化をめぐって―」で，「FD の義務化」の背景，今後の FD の発展の方向性を解説し，2 日目には文学研究科・新田孝彦教授 (写真 2) が事例報告「単位の実質化―小レポートと学習の記録を用いた一つの試み―」で，本学の「単位の実質化」の取組み状況，学生の「自習時間」のデータ，平成 18 年度からの新科目「人文科学の基礎」における小レポートと学習の記録を用いた「単位の実質化」の試みの成果を紹介して，それぞれ大きな反響を呼びました。

(審議のまとめ) の公表や「FD の義務化」が追い風となって，研究会への関心はきわめて高く，参加者は，受付総数がおおよそ 80 校から 200 名，1 日目晩の情報交換会で約 70 名，例年参加者の減る 2 日目の事例報告でも約 130 名と，例年のおよそ 3 割増の盛会となりました。HP で広く案内をした結果，遠く関西学院大学からの参加者もありました。

詳しい内容は下記をご参照ください。

http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/inform/ipan58.pdf

（安藤 厚）

写真 1.　開会のあいさつ（佐伯浩総長）

写真 2.　事例報告（新田孝彦教授）

全学教育 GENERAL EDUCATION

全学教育委員会報告（第 72，73 回）

平成 20 年 5 月 9 日（金）に第 72 回（平成 20 年度第 1 回），8 月 1 日に第 73 回（同第 2 回）の全学教育委員会が開催され，つぎのような議題について話し合いました。

第 72 回全学教育委員会

議題

1. 全学教育委員会小委員会の構成
2. 全学教育科目における不正行為担当委員の選出
3. H20 年度全学教育委員会の検討事項
4. H21 年度以降の総合科目・一般教育演習の充実

報告事項

1. 附属図書館北分館委員会委員の推薦
2. H19 年度 2 学期の GPA
3. 全学教育科目における補講期間・定期試験期間の廃止
4. クラス担任のオフィスアワー
5. 履修相談会 MANAVI の実施報告
6. G8 サミット関連行事等に参加学生の授業等への影響緩和
7. H19 年度教育課程等に関する検証結果
8. H20 年度 1 学期一般教育演習・特別講義の抽選結果及び初習外国語選択者数

小委員会等の構成

議題 1，2 では，各委員が次のように決まりました。

○小委員会委員

理学部　小野寺 彰　委員長・センター長補佐
教育学部　小内 透　センター長補佐
メディア・コミュニケーション研究院　大野 公裕　センター長補佐
高等教育開発研究部　安藤 厚　センター長補佐
文学部　砂田 徹（新任）
経済学部　岡部 洋實（新任）
理学部　神保 秀一
工学部　千歩 修
農学部　川端 潤（新任）
獣医学部　木村 和弘
外国語教育センター　園田 勝英（新任）

○不正行為担当委員

法学部　白取 祐司（新任）
薬学部　松田 正（新任）

議題 3 では，H20 年度全学教育委員会の検討事項について，脇田委員長（副学長），小野寺センター長補佐から説明があり，各項目について小委員会で今後検討をすすめていくことになりました。

平成 20 年度全学教育委員会の検討事項

1. 中期目標・中期計画の実施状況
　中期目標・中期計画の中間評価，来年度実施の認証評価を控え，その進捗状況の検証や計画の着実な達成を図ります。
2. 単位の実質化の着実な推進
・成績評価基準や既存の各制度（「秀」評価・GPA 制度・履修登録単位数の上限設定等）の検証
・学生の申請によるパス・ノンパス制度の検討
・単位制度の実質化（総合科目の 1 単位化など）
・学期末試験を含めた 16 週の授業期間の運用方法の検討
・自習時間の調査，授業法の改善や FD の充実
・TA の活用，TA 研修の充実，TA 研修及び業務実績のデータベース作成
　中期計画の事項である，GPA 制度，履修登録の上限設定，成績評価基準の明示・設定などにより単位の実質化をすすめるとともに，学生の申請によるパス・ノンパス制度，授業法の開発・FD など懸案事項を着実に推進していくことが求められます。
3. 全学教育科目の充実
　履修調整，開講時間帯の検証，「翌期再履修」クラスの検証

4. 全学教育支援体制の強化
・科目責任者会議，責任部局における運営組織の確立
・責任部局の「責任コマ数」，基礎科目等における「全学支援」，一般教育演習・総合科目・外国語演習における「全学協力」の検証
・一般教育演習・外国語演習の依頼基礎数に助教を含めること
5. 非常勤講師・特任教員
・H22 年度以降の非常勤講師削減計画の検討，退職教員に関する承認事項・申合せの見直し，特任教員 (外国人教員) の在り方の検討
6. 新教務情報システムに係る改善事項
・シラバスに「準備学習等の具体的な指示」を追加
・学生の申請によるパス・ノンパス制度への対応
・履修調整 (抽選)，履修取消しのオンライン化
・アカデミックキャリアとして TA 資格化を図るために学生個人のデータベース構築
・新システム入力作業改善事項，教務情報システム上でのシラバス運用の検証
・シラバスのペーパーレス化
7. 新教育課程の実施に伴う教務事務体制
・今後の検討状況を踏まえ，入試・教育体制に合った事務体制を検討
8. 施設・設備の充実
・老朽化した教室・施設を必要に応じ予算要求を行い，施設・設備の充実を図ります。
9. 履修指導
・組織的な履修指導，履修相談会 MANAVI，GPA を用いた修学指導の充実
10. クラス担任制度の強化 (教育改革室・学生委員会と連携)
・オフィスアワーにおける個別指導の実施
・クラスアワー年４回，クラス担任会議年２回開催
・連続欠席学生についてクラス担任に連絡して指導を行う制度の実質化
・学修簿を連帯保証人へ送付する準備
・クラス担任における助教の役割，クラス担任制度の規程化の検討
11. 高大連携授業の今後の在り方
H21 年度にむけて，教育改革室 WG で検討
12. 各種アンケート調査結果の活用
学生による授業評価アンケート，コアカリキュラムアンケート，学生生活実態調査，単位の実質化に関するアンケート，TA アンケート，卒業生アンケート等の活用
13. 既修得単位認定における科目等の見直し
本学で修得した科目の認定方法の検討
14. H19 年度以降の GPA・上限設定・成績評価，カリキュラム，FD 等の改善策について (最終報告) に基づく充実・改善
・学生からの成績評価に関する申立て制度の整備
・高年次履修の時間帯の確保，くさび形履修促進
・外国語演習を院生が正課として履修できる仕組
・e-Learning システム利用のクラス・コミュニケーションシステムと教務情報システム及び図書館蔵書データベースを統合した学生支援システムの構築
・学生への個別指導のシステム (アドバイザー・アドバイジー制度) の整備

H21 年度以降の総合科目・一般教育演習の充実

議題４では，コアカリキュラムとしての総合科目，一般教育演習の在り方・意義を再確認し，カリキュラム上で「導入科目」としての位置づけを強化することになりました。また，幅広い学習や１単位あたりの学修時間とのバランスを考慮し，科目の内容に適した単位数を設定することについて検討しました。

①全学教育科目規程 (別表)，実行教育課程表の科目配列順を見直し，一般教育演習・総合科目を授業科目の配列の先頭におく。

②「一般教育演習」の科目名を「一般教育演習 (フレッシュマンセミナー)」と改める。

③総合科目は，複数の教員によって行われる，大学で学ぶ学問を幅広く分野横断的に紹介する「導入科目」として，一律に多くの予習・復習を求めるより，幅広い履修を勧めるのが適当なことから，単位制度の実質化を図るために，単位数を２単位から１単位に改める。

附属図書館北分館委員会委員の推薦

報告事項では，全学教育委員会委員から推薦する附属図書館北分館委員２名の任期終了による後任委員として，筑和正格 (メディア・コミュニケーション研究院)，栗原正仁 (情報科学研究科) 両教授が推薦されました。

H19 年度２学期の GPA

H19 年度の１・２学期の GPA の分析，比較結果が報告されました。例年，２学期の GPA が１学期より低くなるのは，再履修の影響と考えられます。学期別に見ると前年度よりも上昇傾向にあります。

全学教育科目の補講期間・定期試験期間の廃止

全学教育では本年度から，補講期間・定期試験期間を廃止し，各曜日ともに16週を確保し授業計画のもとに授業を行う形に変更し，それに伴い学生や担当教員に掲示や案内で知らせました。

クラス担任のオフィスアワー

H14年度からクラス担任は，学生の学習上の問題や生活上の問題などの相談に応じるため，昼休みを中心にオフィスアワーを設けています。

今年度も，３月に開催されたクラス担任会議でお願いし，オフィスアワーを設けていただきました。新入生にはすでに掲示で周知しています。

履修相談会 MANAVI

上級生による新入生に対する修学サポート「履修相談会 MANAVI」は，今年度も在学生の無償協力のもとに実施されました。このサポートを利用した新入生は入学者の約63%，1,670名にのぼります。

G8サミット関連行事に参加する学生への配慮

G8サミット開催に先立ち，本学では6月23日から7月11日まで「サステナビリティ・ウィーク」として集中的にシンポジウムや講演等を開催します。この中には学生が参加可能なものも多数含まれており，授業欠席への配慮依頼がありました。

H19年度教育課程等に関する検証

H19年度の教育課程の検証報告として，「北海道大学全学教育自然科学実験アンケート調査」をとりまとめました。

第73回全学教育委員会

議題

1. 学生の申請によるパス / ノンパス制度
2. 英語IVの実施方法及び外国語演習の開講取消しに関する方策
3. H21年度全学教育科目の開講計画
4. 学生からの成績評価に対する申し立て制度の検討

報告事項

1. H19年度の成績評価に関する照会結果及びH20年度第１学期の成績評価の依頼
2. H20年度第１学期履修者数
3. H20年度第２学期の履修調整
4. 英語単位「優秀認定」の実施
5. 英語IIIにおける履修クラスの抽選及び英語IV履修クラスの決定
6. TA研修会の参加状況
7. その他：① H19年度第１学期及び２学期の「学生アンケート」の集計結果，② H18年度第２学期・H19年度第１学期の授業アンケートにおける「自習時間」に関する集計結果

学生の申請によるパス / ノンパス制度

議題１では，「学生の申請によるパス / ノンパス科目」制度の導入が了承されました。

各学部へのアンケート調査の結果や小委員会での議論に基づき，基本設計当初案を修正し，①「教職科目および国際交流科目」登録欄の追加，②パス / ノンパス科目の評価表記法の変更，③卒業に必要な総単位数の記載を加えることになりました。

１年次のパス / ノンパス科目の単位数は１学期２単位，２学期６単位とし，これに伴い時限措置であった「学期加算単位」は廃止，「追加・入替科目」制度も廃止，早期卒業に関連する成績優秀者 (GPA2.5以上) に対する「特例措置」はH21年度以降も継続されます。アンケートをみると，１年次の上限設定は全学部現行どおりとの回答で，制度は定着したといえます。２年次以降で未導入の学部では，今期中期計画を踏まえた検討がなされています。

英語IVの実施法・外国語演習の開講取消し

英語IVのクラス編成をH21年度からレベル別に加え，内容別で学生の希望に沿ったクラス編成を行うことになりました。科目の標準化と個々の授業の特色の明確化に配慮した授業設計が求められます。

また，極端に少人数（履修者３名以下）の外国語演習を開講取消しとすることが了承されました。

H21 年度全学教育科目の開講計画

H21 年度全学教育科目の開講計画のための基礎データ，責任部局・各部局への提供依頼案等の詳細が説明され，了承されました。10 月３日締切りで作業をすすめることになります。

学生からの成績評価に対する申立て制度

平成 20 年度全学教育委員会検討事項にある「学生からの成績評価に対する申立て」制度が議論され，了承されました。これは，成績評価について，なんらかの事情で従前の対応に納得できない学生の問い合わせを可能とする制度で，大学評価機構が行う認証評価の項目にも含まれていることを考慮した制度整備です。

H19 年度の成績評価に関する照会結果・H20 年度の成績評価基準

報告事項では，H19 年度１学期の成績評価で「極端な片寄り」があると思われる科目について担当教員に事情を照会した結果及び，２学期の成績評価に関する照会対象者が報告されました。

また，評価基準について議論があり，H20 年度の成績評価の依頼では，GPA が 1.80 未満，3.00 以上の科目について問合せをすることとしました。対象は主題別科目，総合科目以外は，外国語・理系基礎科目の「必修」科目です。

H20 年度１学期履修者数

H20 年度１学期の登録科目の履修取消し状況，最終的な各科目の履修者数が報告されました。履修取消しをした学生は延べ 623 名，申請書を提出した学生は 527 名，１年次学生の約 6.5% にあたります。

英語単位「優秀認定」

H20 年度１学期の TOEFL-ITP 試験結果にもとづく英語単位「優秀認定」対象者は 124 名で，昨年より減少しているものの，「優」相当の人数が増加し，平均点も上昇している (2007 年度 466.0 → 2008 年度 468.1) ことが報告されました。

TA 研修会の参加状況

TA 研修会への参加は年々増加しており，今後さらに参加・修了率向上を図る方策として，研修参加者への賃金支給を検討することが報告されました。

H19 年度の「学生アンケート」・授業アンケートにおける「自習時間」の集計結果

センター研究部で行っている「新教育課程と単位の実質化に関する学生アンケート」の H19 年度１・２学期分の集計結果と，「授業アンケート」(H18 年度２学期・H19 年度１学期) における学生の「自習時間」の集計結果について報告がありました。

両アンケートによれば，学生の「自習時間」は H18/H19 年度で微増といえます。「単位の実質化」(自習の促進) にむけて，制度の整備と，授業担当教員の工夫が求められています。

（小野寺彰 理学研究院教授・センター長補佐）

＊＊＊　全学教育の科目責任者からひとこと　＊＊＊

生涯スポーツの実践力養成を目指して

「体育学」企画責任者 教育学研究院 教授　水野 眞佐夫

「体育学」は，各学部において選択科目であるにも係わらず，学部１年生の８割に当たる約２千百名が受講する人気科目です（教育学部，理学部，医学部・保健は選択必修）。体育学 A（実技），または，体育学 B（理論）は教職免許状を取得する学生にとって単位の取得が必要であり，教育学研究院専任教員 10 名，高等教育機能開発総合センター教員１名，他大学からの非常勤講師 11 名により，１・２学期において通算 103 コマの授業を展開しています。

体育学実技は，室内種目（バレー・バスケットボール，バドミントン，卓球，エアロビックダンス，トレーニング）と屋外種目（サッカー，ソフトボール，テニス，野外活動），さらに，冬季にはクロスカントリースキーが開講されます。体育学理論では，個人の発達と社会の発展という観点から，スポーツ・身体運動への参加の価値や意味および社会における役割を取り上げます。

仲間とともにスポーツ文化に親しみ，身体運動を楽しみ，技術・戦術の「できる」喜びを味わうだけにとどまらず，生涯にわたる心身の健康の保持・増進に向けて，スポーツ・運動習慣の構築を可能とする学生の力量の形成と実践力の養成を「体育学」は目指しています。

平成 21 年度には，老朽化が著しい第１，第２体育館，及び，小体育館の改修工事が予定されています。また，通年型屋内競技施設の新設も企画されています。整備される施設・環境と共に，進化する「体育学」に大きな期待がよせられています。

英語学習と動機づけ

「英語」企画責任者 大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授　上田 雅信

平成 18 年度から始まった現在の英語のカリキュラムは，北大生に必要な英語力を体系的に養うことを目的としてデザインされています。英語 I は発信力（パラグラフ・ライティング，プレゼンテーションの基礎）の養成，英語 II（オンライン授業）は英語の基礎学力の増強と自律的学習態度の涵養，英語 III は技能別英語運用能力の補強，英語 IV は１年次英語の総仕上げをそれぞれ目的としています。さらに専門課程の授業への橋渡しとしての英語演習があります。このカリキュラムで養成された英語力をそれぞれの分野に応じた実践的な英語運用能力に高めてゆくためには，個々の学習者が内的な動機づけを持ち，長い期間にわたって持続的な努力を続けることが必要です。英語 II の中にも動機づけを高める意図で作られた教材が組み込まれています。英語の授業では，多くの学生にとって一歩クラスの外に出ると実践的に英語を使う機会がほとんどない環境の中で英語学習への意欲や動機づけをいかに高めるかに苦労しています。

まず授業時間に勉強しよう

「社会科学の基礎」企画責任者 経済学研究科 教授　町野 和夫

最近文系の講義科目でもTAを使ってもいいということになり，今学期「社会科学の基礎」(と経済学部のミクロ経済学Ⅰ）で，次のような試みを始めました。それは授業3，4回ごとに，そこまでの理解を確認する問題を，授業1回を使って学生に自分で考えてもらうということです。これだけでは特に目新しくもないのですが，ポイントは，その間二人のTAと私が巡回し，質問のある学生や，方法が分からずにお手上げ状態の学生に，(時には最初から)解説しながら解答作成を助けることです。履修者150名のクラスなので，もう少し人数が欲しいところですが，それでも効果は十分ありました。5月末に中間試験を行いましたが，過去のこの種の授業で50点前後だった平均点は，今回は73点で，しかも60点未満は146名の受験者中わずか33名でした。(履修者120名のミクロ経済学Ⅰでも同様の結果。)大学院生のTAにとっても，初学者の質問にいかに応えるかはとてもよい経験です。全く理解していなかった1年生に「そうか，わかった」と言わせたときの快感は，少ない報酬を補って余りあるようです。

大規模クラスでは，授業に集中できない学生や途中で理解できなくなってしまう学生は学習意欲も低くなりがちですが，この試みは授業時間を使って，授業時間に勉強していなかったそのような学生の実質的な勉強時間を増やしたと言えます。意欲が高まれば家で勉強する時間も？

多様な生物と多様な教育

「自然科学実験(生物学系)」企画責任者 大学院理学研究院 准教授　増田 隆一

自然科学実験の生物実験は，理学部生物科学科学科目教員および非常勤講師によって担当されています。「生物を見る(生命現象を正確に記述する)」「生物に聞く(操作を加えた生物の反応を分析する)」を実験目標に掲げ，各学生が「顕微鏡の使い方」「植物色素の分離」「遺伝子増幅」「ゾウリムシの行動」「珪藻の分類」「イカの解剖」という6テーマの実験に取り組みます。高校の生物の授業では実験が少ない傾向にあるため，本教科では時間をかけて実験に親しんでもらいたいと考えています。北大に入学して初めて顕微鏡に触れる学生でも，実験操作法と結果のまとめ方を習得し，ミクロからマクロにいたる多様な生物の魅力を感じ，「生物学的センス」を磨くことのできる企画を盛り込んでいます。学生たちは多様な生物に出会えることに加え，先輩のティーチングアシスタントや教員との直接対話を通して，講義の聴講や教科書の書面からは得られない貴重な時間を実感しているはずです。生物実験をきっかけにして，生命の多様性を学ぶことはもちろんのこと，かけがえのない生命を大切にする広い視野を育んでくれることを期待しています。

高等教育 HIGHER EDUCATION

清華大学で教育改革に関するフォーラム開催される

6月12，13日の両日，中国・清華大学で学生による大学評価を中心としたフォーラムが開かれました。主催者は同大高等教育センターの史教授です。史先生は2006年度本学高等教育開発研究部の客員教授でした。テーマと発表者は表1の通りです。中国の大学からの報告に加えて，インディアナ大学の報告がありました。日本からは北大のみが参加しました。

大学の教育に関する評価をどうすべきかは，世界中の大学の悩みですが，一つの解決方法がインディアナ大学から提示されました。学生によるカリキュラム評価と学生自身の学習状況を併せ持ったアンケート調査(NSSE:National Survey of Student Engagement)です。NSSEは1998年にインディアナ大学が母体となって発足させたアンケートで，希望する米国の大学は記入されたアンケート用紙をインディアナ大学に送れば，集計して結果を返してくれます。それなりの料金が必要ですが，加盟大学数が700を超えており，その平均値と自校の結果を比較することができます。すなわち，アンケート自体が標準化されているところに，大きな価値があります。例えば，この調査によれば昨年の米国の大学生の週あたり自習時間はおよそ14時間です。

フォーラムに参加した中国の有名大学はNSSEの導入と，その結果を外部評価の材料として使用することを検討しています。本学では1年生を対象にして類似の調査をしていますが，日本もこの種の標準化されたアンケートを導入する時期に来ているのかもしれません。

（細川 敏幸）

表1．プログラム

12日午前 中国の高等教育の質評価：現状と課題
- Yuanyuna Duan（清華大学教育担当副学長）
- Daguang Wu（アモイ大学副学長）
- Jin He（フォード財団北京支所）

午後 高等教育の質評価：考え方と実践
- Heidi Ross（インディアナ大学アジア研究センター長）
- Yuhao Cen（インディアナ大学大学院生）
- Yan Luo（清華大学教育研究所助教授）
- Shaoxue Liu（上海交通大学高等教育研究院教授）
- Liguo Li（人民大学高等教育研究所）

13日午前 グローバル化の観点からの高等教育の質の評価と保証
- Alexander C. McCormik（インディアナ大学高等教育センター長）
- Jillian Kinzie（インディアナ大学高等教育センター副センター長）
- Wei Bao（北京大学教育学部）
- Toshiyuki Hosokawa（北海道大高等教育センター）

午後 中国の高等教育の質評価：将来への流れと重要性
- Jinghuan Shi（清華大学高等教育センター副センター長）
- Fenqiao Yan（清華大学高等教育センター教授）

写真 1.　清華大学・フォーラムの様子

特任教授に郭先生が着任

韓国サンジ（尚志）大学人文社会大学国語国文学科の Goag Jin（郭 稹）先生が，特任教授として 7 月 1 日– 3 月 31 日の予定で来日されました。

郭先生の主な研究領域は漢文学ですが，学術研究審査評価委員，尚志大学人文社会大学長，尚志大学大学院長を歴任され，学術政策の企画実施にあたってこられました。また，韓国学術振興財団の支援のもと『学術研究支援政策の新しいヴィジョンの模索』，『学術研究支援の効率性を高める研究』等の研究成果も発表しています。

10 月 3 日（金）には，午後 6 時 30 分から 8 時まで「韓国尚志大学における大学改革の成果と課題」と題した講演を開催しました。それによれば，尚志大学では環境や地域連携ネットワークを重視した目標をもとに産学協同事業を展開しています。その範囲は，有機農業，高冷地野菜，韓方（医療）の科学化，治水，ゴミ処理，防災，森林育成，観光誘致等多岐にわたっています。大学内でも地熱，太陽光利用などの低炭素代替エネルギー転換を積極的に行っています。また，地域の中心大学として外部評価制度の導入，研究・教育評価と給与への反映，大学の情報公開など，大学改革にも果敢に取り組んでいます。

滞在中に数回の講演会を予定していますので，興味のある方は，ぜひご参加ください。

特任准教授に山田先生が着任

高等教育機能開発総合センター 特任准教授　山田 邦雅

８月１日付で高等教育開発研究部に特任准教授として着任いたしました山田邦雅と申します。わたしは，７月まで本学の物理学専攻素粒子論研究室の研究員として，観測者が加速度運動した場合の素粒子現象についての研究をしておりました。古典力学では，観測者がいくら大きな加速度運動をしても，静止している人と何も見え方は変わりませんが，実際には場の量子論という，より厳密な理論により，観測者はガラッと違う光景を目の当たりにします。たとえば，観測者が加速するだけで，何も存在しない空間が粒子で満たされた空間になってしまったり，粒子同士の分裂が粒子同士の合体になったりするのです。こう言うと一見，目の錯覚が起こるように聞こえますが，加速している人にとってはそれが現実の現象なのです。すごく面白く聞こえますが，実際の研究生活は，複雑な積分をしまくるという地味な作業でした。

一方で，同研究室で博士号を取得して以来，非常勤講師として多くの授業を担当してきました。北海道大学，北海道工業大学，酪農学園大学，北海道東海大学，吉田学園で，物理学に限らず数学や情報学も担当しました。そうした中で，物理学は特に難しい分野であり，わかりやすくする努力と興味をわかせる工夫が不可欠でした。そうして，自然と教育に関心をもち，平成 18 年には指導教官とともに大学初年次向けの物理学の教科書「動画だからわかる物理」の前後編を作成しました。これは，付属の DVD をパソコンでみると，物理現象を CG 動画で見ることができるようになっているものです。物体の動きが中心である力学などは，動画で実際に動きを見て学び，実際に目に見えない粒子や電気などの現象は，仮想的に CG で見ることができるようにと作成したものです。

そして今，高等教育開発研究部に入り，授業改善のサポートをしていくことになりました。しかし，現在も自分の授業をうまく進めることで悩んでいるような状態です。まずは，自分がよい例を多く見たり調べたりしながら真似てみて，それを提案していくような形で活動できればいいなと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

生涯学習 LIFELONG LEARNING

特別講義「大学と社会」開講

本年度も全学教育の特別講義「大学と社会」を開講します。

本講義は，平成10年度より学部1年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。社会の第一線で活躍する本学の卒業生が後輩にあたる主に1年生を対象に，学生時代から現在までの体験談を中心にお話をいただき，受講生である学生は，これらの講義を通じて，大学生活のあり方や将来のキャリアについて考える能力を育成することを目的としています。

今年度も，表1のとおり，9人の卒業生に講師としてお話をいただく予定です。多くの方々が卒業生ならではの熱いメッセージを後輩たちに送っていただけるものと期待しています。

本講義は，もちろん学生向けですが，会場である高等教育機能開発総合センター・大講堂に座席の余裕の範囲内で教職員の方々の参加も可能ですので以下までご連絡ください。

生涯学習計画研究部 准教授 亀野 淳
E-mail jkameno@high.hokudai.ac.jp

（亀野 淳）

表1.「大学と社会」の講義予定（金曜日）

日程	講師（敬称略）		出身学部・研究科
平成20年			
10月 3日	オリエンテーション，アンケートの実施		
10月10日	講義ガイダンス		
10月17日	東江　一紀	翻訳家・ユニカレッジ 講師	文学部
10月24日	若林　陽子	(株)ビジネスコンサルタント	地球環境科学研究科
10月31日	金田　茂	旭川地方検察庁 検事正	法学部
11月 7日	井出　博之	独立行政法人国際協力機構(JICA) 国際協力総合研修所	工学部
11月14日	中間まとめ		
11月21日	渡部　佳文	陶芸家	経済学部
11月28日	杉山　和彦	(株)リスクモンスター 会長	法学部
12月 5日	中間まとめ		
12月19日	松沢　幸一	キリンホールディングス(株) 代表取締役常務取締役	農学部
平成21年			
1月 9日	山科　直子	東京大学大学院総合文化研究科 科学技術インタープリター養成プログラム 特任准教授	工学部
1月23日	菅原　誠	医療法人松田整形外科病院 理事長・院長	医学部
1月30日	まとめ		

※スケジュールは変更の可能性あり

入学者選抜　ADMISSION SYSTEMS

高校生の全学教育科目の聴講はじまる

「高大連携科目についての研究会」（入学者選抜研究部・生涯学習研究部）の今年度の研究活動の一環として，高校生による2008年度第２学期の全学教育科目の試行的聴講が始まりました。今年度も昨年に続き，複数の高等学校の参加にともなう実施面の改善と制度化に向けての課題について検討することになりました。札幌市内・近隣の４つの高等学校（札幌旭丘，札幌北，藤女子，立命館慶祥）から，計23名の高校生（２年生14名，１年生９名；女子20名，男子３名）が16科目（総合科目９科目，主題別科目３科目，一般教育演習４科目）を聴講しています（表１参照）。生徒たちは，北大生の中にまじって授業を受けることに不安を感じながらも，高校では学ぶことのできない知識や考え方に出会い，意欲的に授業を聴講しています。今年度の聴講生は，理系学部への進学を考えている生徒が多いようです。

授業開始に先立ち，９月24日～27日にオリエンテーションを実施しました（授業日程の関係で学校別に実施）。高校生はまず情報教育館４階多目的共用教室（２）で全学教育科目の概要と授業聴講の留意点などについて説明を受けました。その後，高等教育機能開発総合センター及び周辺施設を歩いて授業の行なわれる教室を確認し，附属図書館北分館で利用についての説明を受けました。

高校生の聴講をお認め下さった先生方の多大なご配慮とご協力に感謝申し上げます。この試みは，今年で５回目となり，「北海道大学における高大連携の在り方検討WG」において，制度化・本格実施の準備が進められています。高等学校側の期待も大きく，各学校の進路学習の中に位置づけ，ガイダンスや対応策がとられています。高校生の試行聴講に対するご助言とご支援をお願いいたします。

（山岸 みどり）

写真１．オリエンテーションの様子

表 1．試行聴講の科目名，担当教員，聴講者数

科目区分	講義科目	担当教員	（所属）	聴講者数
＜総合科目：環境と人間＞	地球未来学：2070 年の人類生存環境	池田　元美	（地球環境科学研究院）	1
同上	くらしと動物	伊藤　茂男	（獣医学研究科）	1
同上	脊椎動物の生態と進化	坪田　敏男	（獣医学研究科）	1
同上	食料生産と環境保全	浦野　慎一	（理学研究院）	1
＜総合科目：健康と社会＞	食の健康学	大塚　吉則	（教育学研究院）	2
同上	脳科学：分子から高次機能まで	松島　俊也	（理学研究院）	3
同上	なぜ病気になるのか？ —治療医学から予防医学へ—	武藏　学	（医学研究科）	4
同上	健康長寿と口腔科学２	舩橋　誠	（歯学研究科）	1
＜総合科目：人間と文化＞	観光による地域づくりを考える	敷田　麻美	（観光学高研センター）	1
＜主題別科目：思索と言語＞	認識と真理の哲学—入門—	野村　恭史	（文学研究科）	1
＜主題別科目：歴史の視座＞	古代ローマと奴隷制	砂田　徹	（文学研究科）	1
＜主題別科目：社会の認識＞	考える経営学：論理的に考えよう	谷口　勇仁	（経済学研究科）	2
＜一般教育演習＞	現代中国の社会と経済	遊川　和郎	（メディア・コミュニケーション研究院）	1
同上	数理的思考とコンピュータ	宮腰　政明	（工学研究科）	1
同上	建築と都市	小澤　丈夫	（工学研究科）	1
同上	生殖医学（女性医学）概論	櫻木　範明	（医学研究科）	1
計	16 科目	16 名		23 名

センター日誌　CENTER EVENTS, *April - September*

4月

4日　・(行事) 全学教育 TA 研修会
7日　・(行事) 新入生オリエンテーション
8日　・(行事) 入学式
9日　・(行事) 学部ガイダンス
10日　・第 1 学期授業開始
18日　・(説明会) 大学入試・入試説明会 (札幌)
22日　・(会議) 点検評価報告書作成部会
23日　・(訪問) 滝川高校
24日　・(会議) 平成 20 年度第 1 回教育改革室会議
25日　・センターニュース第 75 号発行
・(会議) 第 1 回教員選考委員会 (准教授)
・(訪問) 八雲高校

5月

8日　・(会議) 平成 20 年度 第 1 回センター運営委員会 (持ち回り)
・(会議) 平成 20 年度 第 1 回予算・施設委員会小委員会
9日　・(会議) 第 72 回全学教育委員会
・(説明会) 宗谷地区 / 大学・短期大学進学相談会 (稚内)
15日　・(会議) 平成 20 年度 第 1 回点検評価委員会
16日　・(会議) 入学者選抜委員会
25日　・(会議) 国立大学アドミッションセンター連絡会議
26日　・(会議) 第 1 回教員選考委員会 (高等教育開発研究部特任准教授)
26日 ~27日
・(会議) 全国大学入学者選抜研究連絡協議会
30日　・(会議) 平成 19 年度第 2 回教育改革室会議

6月

2日　・(会議) 平成 20 年度 第 2 回予算・施設委員会小委員会
4日　・(会議) 第 43 回生涯学習計画研究委員会
・(会議) 平成 20 年度 第 2 回教育改革室会議
・(訪問) 岐阜県多治見高校
6日 ~7日
・(行事) 第 12 回北海道大学教育ワークショップ
9日　・(会議) 第 48 回教務委員会
10日　・(訪問) 札幌第一高校
11日　・(会議) 第 143 回全学教育委員会小委員会
12日　・(訪問) 大阪府関西福祉科学大学高校
・(会議) 第 2 回教員選考委員会 (高等教育開発研究部特任准教授)
17日　・(会議) 平成 20 年度 第 1 回予算・施設委員会
・(訪問) 石川県飯田高校
19日　・(訪問) 岡山県倉敷古城池高校
20日　・平成 21 年度 AO 入試・帰国子女特別選抜学生募集要項公表
21日　・(行事) 教育学部オープンキャンパス
・(訪問) 兵庫県村岡高校
23日　・(会議) 北海道進学コンソーシアム実施委員会
・(会議) 成績評価結果検討専門部会
・(会議) 第 31 回共通授業検討専門委員会
・(訪問) 三重県桑名高校・岐阜県多治見北高校, 岡山県瀬戸高校
25日　・(会議) 大学院教育検討 WG
・(訪問) 有朋高校
・(会議) センター長補佐会
26日　・(会議) 平成 20 年度第 3 回教育改革室会議
27日　・(訪問) 岐阜県多治見北高校, 岡山県井原高校
28日　・(行事) 第 1 回キャンパスツアー
・(説明会) 進学セッション 2008(札幌)
・(会議) 成績評価結果検討専門部会
29日　・(説明会) 外国人留学生のための進学説明会 (東京)
30日　・(会議) 平成 20 年度 第 2 回センター運営委員会
・(訪問) 札幌厚別高校

7月

3日　・(訪問) 札幌厚別高校
3日 ~31日
・(行事) 北海道大学公開講座 (計 8 回)
6日　・(説明会) 外国人留学生のための進学説明会 (大阪)
・(説明会) 全国国公立・有名私大相談会 2008 (名古屋)
9日　・(訪問) 大阪府大阪教育大学附属高校
11日　・平成 21 年度入学者選抜要項発表
12日　・(説明会) 全国国公立・有名私大相談会 2008(東京)
15日　・(説明会) 大麻高校
16日　・(会議) 第 2 回教員選考委員会 (准教授)
・(訪問) 鹿児島県鹿児島育英館高校
17日　・(行事) 工学部土木卒業生に対するキャンパスツアー
18日　・(説明会) 北海道大学入試説明会 (高校教諭対象)
20日　・(説明会) 全国国公立・有名私大相談会 2008 (大阪)
21日　・(行事) 北大セミナー in 旭川
23日　・(会議) 第 144 回全学教育委員会小委員会
・(説明会) 帯広柏葉高校
27日　・(説明会) 全国国公立・有名私大相談会 2008(横浜)
31日　・(会議) 第 3 回教員選考委員会 (准教授)
・(会議) 平成 20 年度第 4 回教育改革室会議
・(会議) 北海道進学コンソーシアム実施委員会

8月

1日 ~2日
・(行事) オープンキャンパス (函館キャンパス)
1日　・(会議) 第 73 回全学教育委員会

2 日　・(行事) 北大オープンキャンパスを 100 倍楽しむ！
　　プレオープンキャンパス 2008
3 日 -5 日
　　・(行事) オープンキャンパス (札幌キャンパス)
7 日　・(会議) 北海道大学における高大連携在り方検討サブ WG
25 日　・(訪問) 大阪府清風南海高校
27 日　・(説明会) 中標津高校
28 日　・(説明会) 釧路江南高校
29 日　・(説明会) 帯広三条高校
　　・(説明会) 釧路湖陵高校
31 日　・(説明会) 主要大学説明会 (東京)

9 月

2 日　・(会議) 第 3 回大学院教育検討 WG
3 日　・(会議) 共通授業検討専門委員会
10 日　・(会議) 第 49 回教務委員会
17 日　・(会議) 科目責任者会議
22 日　・(訪問) 函館高校
23 日　・(説明会) 主要大学説明会 (大阪)
28 日　・(説明会) 主要大学説明会 (札幌)
29 日　・(説明会) 岩見沢東高校

行事予定　SCHEDULE, *October - February*

【日（曜日）】		【行事】
10 月	6(月)	抽選科目の結果発表日及び追加申込日
	7(火) ～ 10(金)	平成 18 ～ 20 年度入学者履修届 Web 入力
	7(火) ～ 8(水)	平成 17 年度以前入学者履修届受付
12 月	中旬	履修登録した科目の取消し受付
	26(金) ～ 1 月 5 日 (月)	冬季休業日
1 月	6(火)	授業再開
	16(金)	休講 : 大学入試センター試験準備のため
	17(土) ～ 18(日)	大学入試センター試験
	21(水)	水曜日の授業の終了日 (16 週目)
	22(木)	木曜日の授業の終了日 (16 週目)
	27(火)	火曜日の授業の終了日 (16 週目)
	28(水)	月曜日の授業を行う日
	29(木)	初習外国語統一試験日 (木曜日の授業終了済)
2 月	3(火)	月曜日の授業を行う日
	4(水) ～ 5(木)	授業を行わない日 (水，木曜日の授業終了)
	6(金)	金曜日の授業の終了日 (16 週目)
	9(月)	月曜日の授業の終了日 (16 週目)
	9(月)	第 2 学期授業終了日
	12(木)	成績報告締切 (非常勤〔帳票〕)
	19(木) 正午	成績報告締切 (常勤〔Web 入力〕)
	25(水)	北海道大学第 2 次入学試験 (前期日程)
	27(金)	1 年次学修簿配付日

センターニュース　2008, No. 76　目次

＜巻頭言＞ボローニャ宣言と札幌サステイナビリティ宣言―大学教育の国際化をめぐって―
本堂　武夫 …… 1

魅力ある授業を目指して
―北海道大学教育ワークショップ開催― …… 4

第 58 回東北・北海道地区大学一般教育研究会を開催 …… 7

全学教育委員会報告 (第 72, 73 回) …… 8

全学教育の科目責任者からひとこと

「体育学」企画責任者
水野　眞佐夫 …… 12

「英語」企画責任者
上田　雅信 …… 12

「社会科学の基礎」企画責任者
町野　和夫 …… 13

「自然科学実験」企画責任者
増田　隆一 …… 13

精華大学で教育改革に関するフォーラム開催される …… 14

特任教授に郭先生が着任 …… 15

特任准教授に山田先生が着任
山田　邦雅 …… 16

特別講義「大学と社会」開講
亀野　　淳 …… 17

高校生の全学教育科目の聴講はじまる …… 18

センター日誌・行事予定 …… 20

目次・編集後記 …… 22

編集後記

日本人は，○○メソッドが好きだ。最近売れている本に，フィンランド・メソッド関係のものがある。学力世界一の背景には 1 つの形があるというのだ。

昨年，フィンランド人が私にこうたずねた「私たちの良さって何か知ってる？」と。「多様性ですね？」と答えるやいなや,「方法なんて十人十色なのよ」と返してきた。

日本人はブランドものが好きだ。しかし，それらは，日本の「羅針盤」の無さを，内外に示しているに他ならないのである。(うさぎ)

センターニュース　第 76 号
（北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌）
発 行 日：2008 年 10 月 5 日
発 行 元：北海道大学高等教育機能開発総合センター
〒 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
電話 (011)716-2111・FAX (011)706-7854
編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・山田邦雅・安藤 厚
木村 純・川初清典・亀野 淳・山岸みどり
鈴木 誠・池田文人
ご意見，お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521
インターネット ホームページ：
http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html